ISSN 0917－4729

# 北方民族博物館だより

No.95

H9.35　女性用刃物＜メノコマキリ＞　北海道アイヌ
北海道　札幌　豊川重雄作　28.9cm

アイヌ語で小刀を総称して「マキリ」と呼ぶ。「メノコ」は女性の意で、本資料は男性の使うマキリよりも若干小型の女性用ナイフである。マキリは、山野での生業や彫刻、料理、衣服の製作など、アイヌの生活に欠かせない道具であり、常に腰に下げて携帯された。鞘（さや）と柄にはイタヤカエデやクルミの木が用いられ、本資料のように精緻（せいち）な彫刻が施されるのが特徴である。根付けとして、本資料にはエゾシカの角の根元部分が用いられている。

目次　Contents

1　女性用刃物＜メノコマキリ＞
2－4　第29回北方民族文化シンポジウム網走「環境変化と先住民の生業文化－開発と適応」
5　講座「北方海域と船」／講座「土器模様の原体を学ぶ　上級編」
6　北海道博物館紀行「利尻町立博物館」／講座「オホーツク土器の考古学」
7　ロビー展「古裂（こぎれ）合わせ－浜田智津子の四季のお細工もの」
／講習会「はじめてのお細工物づくり」／講習会「お細工物づくり（中級）」
8　INFORMATION

北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

## 第29回北方民族文化シンポジウム網走

# 環境変化と先住民の生業文化
# ー開発と適応ー

2014. 10. 4-10. 5

**会場　オホーツク・文化交流センター**
**（エコーセンター2000）**

今年度のシンポジウムでは、「環境変化と先住民の生業文化」の第４回目として「開発と適応」をテーマとしました。以下に各発表の概要を紹介します。

### 第１部：北方地域における資源と開発

**「北方林の生態と環境変化の影響」**
**寺澤　和彦氏（東京農業大学）**

世界の森林は、北方林、温帯林、熱帯林の３つに大きく区分される。このうち北方林は、北緯50～70度の範囲に北極を取り囲むように分布する森林で、世界の森林面積の約1/4を占める。針葉樹が主体であり、森林火災などの跡に広葉樹が生育するが、低木類も含めて樹種構成は単純である。北方林の生態学的特徴としては、低温と低降水量、永久凍土の存在、土壌中の大量の有機炭素の蓄積、森林火災による撹乱と更新などの生態学的特徴をもつ。

近年、人間活動の環境への影響が地球規模に拡大するにつれ、北方林生態系にも変化が生じている。例えば地球温暖化により、永久凍土の融解、樹木の分布の変化、森林火災の増加などの現象が報告されている。北方林における生態系の変化は、温室効果ガスの放出などを通じて地球環境にフィードバックする可能性がある。こうした変化を把握し、対処方法を検討するため、自然科学者と先住民との協働が注目されている。

寺澤 和彦 氏

**「サハリンの石油ガス開発における日本の参画」**
**本村　眞澄氏（石油天然ガス・金属鉱物資源機構）**

サハリンにおける最初の油田発見は1910年だが、1918年には日本企業が進出し、1925年には本格的な開発事業が展開された。第二次世界大戦後は日ソ経済委員会での協議を経て、1974年にソ連に資金と技術協力を行うサハリン石油開発協力株式会社が設立され、2つの海洋油田が発見された。ソ連崩壊後、この事業はサハリン1プロジェクトに引き継がれ、日本からはサハリン石油ガス開発株式会社が参加した。その後、新たに発見された油ガス田の開発に関してサハリン２プロジェクトが立ち上げられ、日本からは三井物産、三菱商事が参加した。サハリン２では2009年３月に液化天然ガスの生産が開始され、その約７割が日本に輸出されている。

輸入する石油の約９割を中東産が占める日本にとって、サハリンのエネルギー資源は経済性、エネルギー安全保障の点で重要であり、日本の高い開発技術と安定したエネルギー市場はロシアにとって魅力的である。両国はエネルギー面で相互補完的な関係にあると言える。

本村 眞澄 氏

### 第２部：北米における開発

**「アラスカにおける石油開発と先住民権との関係史」**
**井上　敏昭氏（城西国際大学）**

1960年代後半、北極海岸地帯では大規模な油田開発が活発化し、その後も先住民が伝統的に利用してきた動物資源の生息環境を脅かす石油開発計画が相次いで浮上した。

1988年、北極圏国立野生生物保護区・1002地区の開発計画が発表されると、先住民グィッチンの代表者会議は反対を決議した。1002地区は、グイッチンにとって食物・象徴として重要なカリブー（野生トナカイ）の繁殖地なのだが、彼らはこの地区から移動してくるカリブーを狩猟してきたため、現地の開発に対する法的権限を持っていない。一方、1002地区に位置する集落カクトビクの先住民政府は、開発に賛成の立場だが、伝統的な捕鯨を妨げるボーフォート海での海底油田試掘には反対している。

両者に共通するのは、法的権限の及ばない場所で開発がおこなわれる点、そして先住民が伝統的生活の核心を脅かす開発には反対し、賛成の場合にも重大な決定に関与できることを条件にしていることである。

井上 敏昭 氏

**「変化を認識しながらおこなう伝統的知識の保存」**
**サミュエル　アレクサンダー氏（グイッチン伝統文化伝承者）**

先住民は、環境変化を認識するように訓練されており、それによって自然界における人間活動や開発の影響に気づくことができる。私たちはこうした影響に対し、年長者から受け継がれてきた「良いやり方でやる」という方法で対処している。これは物事を積極的かつ丁寧に行い、敬意を示すということで、そうすれば反対する人びとをも味方にすることができる。先住民グイッチンは、この方法で世界一強力な政府や企業から北極圏国立野生生物保護区を守ることができた。鍵となるのは敬意であり、人々が共通して敬意を示す対象がわかれば、互いに理解しあえるのだ。

西欧的な意味での開発の概念は限定的であり、数百万年にわたる自然の発展には到底及ばない。確かに西欧世界は先住民の生活に強大な影響を及ぼしてきた。しかし先住民の価値観や行動原理も、環境と調和した生活を送る方法として西欧世界に認識され、導入されつつある。

サミュエル アレクサンダー 氏

## 第３部：ロシア極東地域における開発

**「考古学からみたオホーツク文化の毛皮交易」**
**種石　悠（北海道立北方民族博物館）**

７～８世紀、唐、渤海、古代日本では毛皮の需要が高まっていた。北海道のオホーツク文化についても、毛皮交易に携わっていたとする意見が示されている。本発表では、オホーツク文化集団の毛皮を含む交易活動について検討した。

オホーツク文化期の遺跡から出土する動物遺存体の種類や数量から、毛皮交易を目的とした狩猟活動の存在を確証することは困難だった。また交易記録では、北海道から中国へ多量の毛皮が供給されたのは近世になってからのこととされている。こうした点から、北海道のオホーツク文化集団は、毛皮を中心とする大規模な交易を行っていた可能性は低いと考えられる。北海道のオホーツク文化人に関しては、毛皮交易に特化した生業を営んでいたのではなく、毛皮獣を含む周囲の多様な資源を開発することによって環境に適応していたと考えるべきであろう。

種石 悠

**「クロテンの森の先住民族：極東ロシアの森林開発・森林保護とウデヘの人々」**
**佐々木　史郎氏（国立民族学博物館）**

極東ロシアに暮らすウデヘの人々は、ソ連崩壊以来ロシア政府の森林開発と森林保護という相矛盾する政策に翻弄されてきた。ビキン川流域のクラースヌィ・ヤール村では、ソ連崩壊後、国営企業を株式会社「ビキン」へと転換した。猟師たちはその傘下の組織の所属となり、商業的狩猟活動が維持されている。一方、ホル川流域のグアシュギ村では、残された森林が狭く、その資源が劣化していたため、国営企業の民営化はうまくいっていない。

近年、「ビキン」の管理する森が国立公園の指定を受けて狩猟が禁止される可能性が高まり、問題となっている。狩猟による収入は僅（わず）かだが、ウデヘにとっては象徴的な価値があり、森林保全にもつながっている。

沿海地方の森林を国立公園に指定することが、ウデヘにどのような影響を及ぼすのか、ロシア国民が求める野生動物・自然保護になるのか、再度検討する必要がある。

佐々木 史郎 氏

## 第４部：西シベリアにおける開発

**「変化する環境におけるハンティの生業―西シベリアにおけるトナカイ飼育と先住民の生存戦略」**
**ステファン　デュデック氏（ラップランド大学北極センター）**

西シベリアのトナカイ飼育民ハンティの生活は、原油採掘によって脅かされているが、それにもかかわらず伝統的な生業や文化を維持し、家畜トナカイを増やしている。しかし一方では、経済的に石油産業からの補償金に依存し、それによって高い生活水準を保っているという側面もある。本発表では、原油採掘の強い影響下にあるトナカイ飼育民ハンティの生業戦略を描出した。

ステファン デュデック 氏

トナカイ飼育民は、複数の生業を切り替え、生活拠点を移動することもできたため、行政や経済の中心地から離れ、問題を避けるという戦略をもちいてきた。それにより、外部からの干渉を極力受けず、伝統的な価値観や文化を維持できる空間を保持してきた。トナカイ飼育は、こうした先住民の自主性を維持するために不可欠な要素だったのだ。

**「西シベリアの石油採掘と環境変化に対するハンティの反応」**
**大石　侑香氏（首都大学東京大学院）**

西シベリアのハンティ−マンシ自治管区では1960年代に石油産業が本格化し、住民は多大な影響を被ってきた。一方、1992年にはハンティの用益権が規定され、石油会社はハンティと地方政府の許可なしでは土地を採掘地として使用することができなくなった。本発表では、こうした状況下で住民がいかに開発と関わっているかを検討した。

石油採掘場に近いヌムト集落では、石油会社の存在は経済的に重要で、石油開発が住民生活に必要なものと認識されている。この地域の人びとは、ソ連崩壊後、世帯ごとに分散して生活してきたため、行政単位としての結束力は弱まり、地方行政府が住民を経済的に統治する状況は失われている。しかし、ロシアの統治から離れ、かつ開発側へのアクセスが可能という状態こそが、彼らが伝統的な生業活動を維持する上で重要だった。現地社会では地域としての結束力よりは、強いリーダーの存在が重要なのである。

大石 侑香 氏

＊　＊　＊

本シンポジウムの関連事業として、９月25日(木)、午後６時半から、オホーツク・文化交流センター、エコーホールで映画「ジョバンニの島」の上映会をおこないました。上映会には、網走市や近隣市町村の住民を中心に222名の入場者がありました。

（学芸グループ　中田　篤）

シンポジウム会場の様子

講座

# 北方海域と船
## ー探検と冒険の物語ー

2014. 8. 30

**講師　新谷 暁生（しんや あきお） 氏（冒険家・シーカヤックガイド）**

第29回特別展の関連講座として、北方海域のカヤック体験を重ねてこられた新谷暁生氏を講師に、北太平洋を舞台に海を乗り出した人びとについてお話いただきました。

新谷氏はヒマラヤ、カラコルム、アンデスの山々を登る冒険とともにシーカヤックによる海の旅へと冒険の領域を広げてきました。冬季の南米南端ホーン岬のカヤック漕破、またアリューシャン海域における数々のカヤック漕破を経験されてきました。アリューシャン海域における体験から、厳しい北方海域を生活の場としてきた先住民アリュートの生活や文化を考える契機となったと述べられています。アリュートの文化を中心とした講演の概要は次のとおりです。

新谷　暁生氏

烈風で樹木が育ちにくく、不毛の地とも思われるアリューシャン列島に住んできたアリュートは、食料や生活用品すべてを海から得ていた。アリュートの交通手段は海獣の皮と流木で造られた皮船カヤックに限られていたが、優れた狩猟や漁労技術をもとに、豊かな海の資源を利用して、老人の知恵や知識が尊ばれる長寿社会を形成してきた。

アリュートの人びとはまた、カヤックの改良にも取り組んできた。遠方への航海のために骨組の構造を補強した二人乗りのカヤックが造られた。激しい潮流に耐えるためにカヤックの構造がしなやかに動くよう、骨組の要所にジョイントを設けた。ほかにも直進性を得るための船首の二重構造、追い波を考慮した船尾構造など、アリュートのカヤックは極限まで進化した海の乗り物である。

（学芸グループ　渡部　裕）

会場の様子

講座

# 土器模様の原体を学ぶ　上級編

2014. 9. 20

**講師　岡田 淳子（当館 館長）**

今年４月に行われた前回の講座「土器模様の原体を学ぶ初級編」では、縄文土器に付けられる縄文の原体となる縄の、基本的な作り方と施文法を学びました。今回のテーマは、①原体である縄と棒状のものとを組み合わせた原体の利用、②木質棒の利用、③貝殻の利用の３点です。

縄と棒状のものとの組み合わせた原体でできる文様とは、縄を軸となる棒に巻きつけて土器表面に転がして施文する、考古学で撚糸文（よりいともん）と呼ばれる文様のことです。縄の巻き方や巻く本数によって多様な文様が生まれます。

木質棒の利用では、原体となる木の棒にさまざまな彫刻を施し、これを土器表面に転がすことでスタンプのように施文される回転押型文（かいてんおしがたもん）について学びました。この施文方法は、北東アジアの新石器文化の影響が考えられています。講座に参加された皆さんは思い思いの彫刻を軸棒に施し、粘土の上にさまざまに現れる文様に驚いている様子でした。

撚糸文の施文実験

貝殻を利用した文様は、貝殻文（かいがらもん）と呼ばれます。本州の関東地方でみられるこの文様には、アサリのような二枚貝の縁を粘土に押しつけ、縁の両端を交互に上げながら少しずつずらして付けるジグザグ文様や、貝の縁を土器表面に押しつけながら引いて付ける線状の文様などがあります。

今回の上級編講座でも、実際に施文を体験することで、縄とほかの素材とを組み合わせた原体、そして縄以外の原体が付ける文様について理解を深めることができました。今回解説された文様原体も、前回学んだ縄を原体とする文様と同じく、ちょっとした加工や組み合わせによって豊かな土器文様を表現することができるのです。

（学芸グループ　種石　悠）

原体をつくる
岡田館長

## 北海道博物館紀行

# 利尻町立博物館

2014. 9. 21

**講師　西谷 榮治 氏（利尻町教育委員会 教育・学芸課長）**

「北海道博物館紀行」では、毎回講師をお招きし、道内の博物館活動について紹介いただいています。今回は、「利尻島に行き交う歴史ー人は北へ物は南へー」と題して、30年以上博物館の運営に関わってきた利尻町教育委員会の西谷榮治教育・学芸課長から利尻町立博物館と利尻島の歴史について解説いただきました。

西谷氏は、利尻町立博物館の開館の契機となった出来事として、1977年の利尻島亦稚貝塚の発掘調査を挙げます。亦稚貝塚は、サハリンや北海道のオホーツク海沿岸に営まれた狩猟採集民文化であるオホーツク文化の遺跡です。彼らの食べかすである骨や貝殻が捨てられ堆積したため、貝塚と呼ばれます。当時この調査を担当していたのは現在当館館長である岡田淳子であり西谷氏も参加していました。

西谷 榮治 氏

亦稚貝塚の調査で、当館にもレプリカ展示がある土器２点と全面に立体的な彫刻をもつトナカイ角製品が出土しました。これらの出土資料は、1979年に北海道有形文化財に指定されました。亦稚貝塚から出土した重要な資料を保管・継承するため、そして、利尻町の歴史を探究し、先人の努力と偉業を後世に伝えるため、1980年に利尻町立博物館が開館しました。

利尻町立博物館がこれから果たす役割は、調査研究と情報発信であるといいます。利尻島は、人や物が盛んに往来してきました。朝鮮王朝の官吏８人の漂着（1696年）、ロシア対策のための会津藩士による島の警護（1808年以降）、幕末のペリー来航時の通訳に英語を教えたアメリカ人ラナルド・マクドナルドの来島（1848年）などがあり、また島のニシン漁やコンブ漁によって海産物は島から南へともたらされていきました。

利尻島という離島社会の歴史と文化の調査研究を通じて情報を発信することで、地域の未来に役立つ博物館を目指していきたいと西谷氏は講演をまとめられました。

（学芸グループ　種石　悠）

参加者の質問に答える西谷氏

## 講座

# オホーツク土器の考古学

2014. 11. 15

**講師　種石 悠（当館 学芸員）**

オホーツク文化は、本州の古墳時代後半から平安時代までの時期に相当する紀元６世紀から11世紀にかけて、北海道、サハリン、千島列島のオホーツク海沿岸に形成された狩猟採集民の文化です。ほぼ同じ時期に北海道で営まれていた擦文文化とともに、アイヌ文化の成立に大きな影響を及ぼしたことが人類学や考古学の研究成果によって明らかになってきました。

本講座では、オホーツク文化について理解を深めていただくことを目的に、遺跡から出土する数多くの物質文化のなかでも、特に土器文化に焦点を当て、解説しました。

オホーツク文化の土器は、昭和初年、考古学者河野広道によって縄文土器とも擦文土器とも異なる土器として区別され、「オホーツク式土器群」と名付けられました。

６世紀から11世紀まで700年余りの間作られ続けたオホーツク式土器は、大きく前期（６、７世紀）、後期（８、９世紀）、終末期（10、11世紀）に分けられます。前期の土器は円形の穴や刻み目、スタンプ状の文様で飾られます。サハリンから渡来した土器が北海道に広がりをみせる時期です。後期になると、北海道北部は工具で線を描いて施文されます。北海道東部の土器はボタン状の粘土粒やソーメン状の粘土紐を貼り付けてさまざまな文様が施されます。後期は、サハリン、北海道で土器の装飾に地域的な違いが生まれる時期です。終末期には、北海道の北部と東部でそれぞれ擦文土器との融合が進みます。

講座では、ヤマブドウのジュースを試飲していただきました。これは網走市モヨロ貝塚出土の土器に附着していた炭化物から、酒石酸が検出されたことを参考にした試みでした。酒石酸はヤマブドウに多く含まれ、アルコールに溶けにくい性質のため、土器でワインを作ったとすると、器にその結晶が付着します。ただし、オホーツク文化人がワインを飲んでいたかどうかは分析例が１例と少なく、まだ明らかになっていません。

土器は、出土した遺跡の時代を示すだけでなく、当時の食文化を知るための手がかりにもなりうるのです。

（学芸グループ　種石　悠）

常設展示での解説

## ロビー展　オホーツクシリーズ⑥

# 古裂（こぎれ）合わせ
# ～浜田智津子の四季のお細工もの

2014. 10. 11－10. 26

北方民族博物館では、地域の文化をテーマとする展示、「オホーツクシリーズ」を平成24年度からはじめました。

６回目となる今回は「古裂（こぎれ）合わせ　浜田智津子の四季のお細工もの」と題し、北見市在住のお細工物作家・浜田智津子さんの作品を紹介しました。

「お細工もの」は、ちりめんとよばれる細かな凹凸のある絹織物を主な材料にして、江戸時代以降に作られるようになった工芸品です。

浜田さんは京都府で習得した伝統的な技に加え、丹念な材料の選択と独特の発想力でオリジナリティあふれる作品をうみだし、国内外で高く評価されています。

展示は四季をテーマにし、新春用のお供え餅や、端午の節句の兜（かぶと）飾り、ひな人形や、七夕飾り、クリスマスツリーなどを出品いただいたほか、本展のための新作、アザラシの振り子人形や四季の遊び箪笥（たんす）も展示しました。

短い会期ではありましたが、5回も通ってくださったという方をはじめ、大勢がご覧くださいました。

（学芸グループ　笹倉 いる美）

展示会場の様子

講習会の様子（左　浜田 智津子 氏）

## 講習会

# はじめてのお細工物づくり

2014. 10. 11

**講師　浜田 智津子 氏　（お細工物作家）**

お細工物づくりをはじめて作る方を対象にした講習会を開催しました。題材はバラの針刺しです。バラの針刺しの作り方は、お細工物の本などでも紹介されているそうですが、浜田さんは針山が傷んだときに、取り替えができるようにと工夫した作り方を指導くださいました。

はじめに外側の輪の部分を作り、次に内側の針山部分をつくります。針山部分は、花芯と花びら５枚から構成されます。この花びらのために浜田さんが、さまざまな色や模様の古裂を用意してくださいました。

作品づくりの合間には、ちりめんの説明などもいれていただき、参加者はお細工ものづくりにより親しまれたようです。

（学芸グループ　笹倉 いる美）

## 講習会

# お細工物づくり（中級）

2014. 10. 19

**講師　浜田 智津子 氏　（お細工物作家）**

お細工物や手芸の経験者を対象とした、中級者向けのお細工物づくり講習会も開催しました。

中級向け講習会では、「ちりめんのハマナス」を作りました。ハマナスの花が網走の海岸などでよくみられることにちなんで、浜田さんが考案されたものです。

ハマナスの花びらの色を出すために、材料のちりめんはわざわざ染めにだしてくださり、色のぼかし具合にあわせて、糸の色もかえました。

花蕊（はなしべ）のつくりや、花びらのふくらみの出し方などに、浜田さん流のこつがあり、丁寧に説明してくださいました。

長時間の集中した作業となりましたが、参加者は上品なできあがりを喜ばれていました。

（学芸グループ　笹倉 いる美）

ロビー展　オホーツクシリーズ⑦

## 写真展　北の状景から

地元に暮らす撮影者ならではの視点で、オホーツク地域を写真で紹介します。

■会期：平成27年１月６日(火)～１月25日(日)
■会場：北方民族博物館ロビー（観覧無料）
■主催：北海道立北方民族博物館

トナカイの搾乳（2006年９月／モンゴル）

企 画 展

## 白い食べ物・赤い食べ物 ～北方狩猟・牧畜民の食文化

北方の牧畜民・狩猟民にとって重要な食物資源となってきた動物性蛋白質（たんぱく）である白い食べ物（乳製品）、赤い食べ物（野生動物・家畜の肉や内臓）に注目し、調理、加工具、保管容器などの民族資料や写真で伝統的な食文化を紹介します。

■会期：平成27年１月31日(土)～４月５日(日)
■会場：北方民族博物館ロビー（観覧無料）
■関連事業

平成27年１月31日(土) 13:30～15:00
講座「生きている食料庫－食材としてのトナカイ」
講師　中田 篤（当館主任学芸員）

平成27年２月21日(土) 13:30～15:00
講座「現代モンゴルの食事：草原と都市」
講師　風戸 真理 氏(北星学園大学短期大学部専任講師)

平成27年３月７日(土) 13:30～15:00
講座「ウシも喜ぶ!? 新しい酪農
－オホーツク地域の牛乳生産の現在」
講師　向井 弘 氏（向井牧場）

# INFORMATION

## 行事報告

◆９月13日(土)、はくぶつかんクラブ「魚の皮の小物」（講師：山田祥子学芸員）を開催しました。

完成した小物を見せる参加者

◆９月25日(木)、上映会「ジョバンニの島」（会場：オホーツク・文化交流センター（エコーセンター2000））を開催しました。

◆10月18日(土)、講習会「カムチャツカのサケ料理づくり」（講師：渡部裕学芸員）を開催しました。

◆10月25日(土)、はくぶつかんクラブ「ビーズ織り」（講師：濱名亜璃紗解説員）を開催しました。

◆11月３日(月・祝)、第６回はくぶつかんまつりを開催しました。今回のまつりでは、顔だしパネルや平原インディアンのティピ（テント）、ボーラの狩猟体験などが新たに加わりました。

無料で提供されたロシアのスープ、ボルシチも大好評でした。

はくぶつかんまつりで行った
はくぶつかんクイズの様子

◆11月19日(水)、20日(木)、網走市能取岬西岸遺跡の測量調査を実施しました。

◆11月23日(日)、あばしりまなび塾フェスティバル（会場：オホーツク・文化交流センター（エコーセンター2000））で「クリスマスのカードづくり」を行いました。

◆12月13日(土)、はくぶつかんクラブ「冬休みミュージアム・アルバムづくり」（講師：菅原章子解説員）を開催しました。

## お知らせ

◆岡田淳子当館館長が、平成26年度（第66回）北海道文化賞を受賞しました。

岡田館長は、アラスカと北海道の考古学、文化人類学調査を行い、両地域の比較を通じて北太平洋沿岸先住民文化の研究を進めてきました。そして当館の設計段階から積極的に協力と助言を行ってきました。また、文化人類学の立場から女性学やジェンダー研究の分野でも多くの提言と発信を行いました。

こうした業績を含め、北海道の北方文化研究の発展に長年にわたって寄与してきたことから、今回の受賞となりました。

北方民族博物館だより
No. 95

平成26(2014)年12月19日発行
編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888　Fax 0152-45-3889
e-mail：tonakai@hoppohm.org
http：//hoppohm.org
指定管理者
一般財団法人北方文化振興協会